

神門地区遺跡詳細分布調査報告書

1989年3月

出雲市教育委員会

神門地区遺跡詳細分布調査報告書

1989年3月

出雲市教育委員会

は じ め に

出雲市神門地区は、斐伊川・神戸川治水事業に関連して、今後急速な開発が予想される地域です。

こうしたことから、今年度の国庫補助事業として、神門地区遺跡詳細分布調査を実施しました。

分布調査は、神門地区全域を現地踏査して遺跡地図を作成するほか、これまで発掘調査が行なわれたことのない田畠遺跡の範囲確認トレンチ調査を実施して、貴重な成果を得ることができました。

こうした成果をふまえたうえで、今後の埋蔵文化財保護行政をさらに進展させていきたいと存じます。

厳しい自然条件のもと、調査にご指導、ご協力を賜わりました関係各位に、厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

出雲市教育委員会

教育長 石 飛 満

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が、昭和63年度に国庫補助事業として実施した神門地区遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は、遺跡詳細分布調査のほか、田畠遺跡の範囲確認のための発掘調査を行なった。
3. 発掘調査は、昭和63年11月7日から12月19日まで実施し、遺跡詳細分布調査は、昭和63年12月から平成元年2月にかけて行なった。
4. 調査体制は次のとおりである。

調査指導者　田中義昭（島根大学法文学部教授）

黒谷達典（大代中学校教頭）

片寄義春（出雲教育事務所指導主事）

鳥谷芳雄（島根県教育委員会文化課主事）

調査員　　川上　稔（出雲市教育委員会社会教育課主事）

事務局　　奥井正之（出雲市教育委員会社会教育課長）

5. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の方々から多大の協力を賜った。記して謝意を表します。
6. 本書の執筆、編集は調査員の手によるが、遺物の整理等には、山本ハリノ、山崎藤枝、前田安子、勝部久子の各氏の協力を得た。
7. 本遺跡の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。

目　　次

1. 位置と環境	1
2. 調査の概要	3
3. 田畠遺跡範囲確認発掘調査	6
4. 遺跡詳細分布調査	26
①遺跡一覧表	
②遺跡地図	

1. 位置と環境

出雲市神西地区は、出雲市街地から約3km南西に位置し、神戸川左岸に広がる地域である。旧国道が地区の北を通り、旧国道沿いには、町並が形成されている。

神門地区は、古志地区と同じく、南北に細長い地域で、その北を神戸川によって画され、南には丘陵地が広がっている。平野の縁辺部であるため、埋蔵文化財は質、量とも豊かで、市内でも塩冶地区と比肩する遺跡の密集地となっている。

沖積平野の旧自然堤防上は、宅地や畠地として土地利用がなされているが、集落遺跡も数多く存在する。古志本郷遺跡の西には、今年度の範囲確認発掘調査によって弥生時代の竪穴住居跡が検出された田畠遺跡があるほか、貝塚として古くから知られている知井宮多聞院遺跡や、今年度の分布調査で新たに発見された東原遺跡などが旧自然堤防上のあらゆる地点に認められる。さらには、国指定史跡になっている宝塚古墳や、墳丘を消失した天神原古墳などの古墳も立地している。

また、山麓には、県指定史跡になっている放レ山古墳、妙蓮寺山古墳などのほか、真幸ヶ丘横穴群、地蔵堂横穴群といった横穴も数多くある。横穴のなかには、深田谷横穴の



図1 神門地区とその周辺の主要遺跡

1. 天神遺跡
2. 葉山古墳
3. 葉山遺跡
4. 地蔵山古墳
5. 小坂古墳
6. 井上横穴群
7. 古志本郷遺跡
8. 大桜古墳
9. 古志遺跡
10. 田畠遺跡
11. 放レ山古墳
12. 宇賀池堤跡
13. 妙蓮寺山古墳
14. 地蔵堂横穴群
15. 宝塚古墳
16. 多聞院遺跡
17. 神谷たたら跡
18. 深田谷横穴群

よう、線刻人物壁画をもつものもある。さらには、平野部では極めて類例の少ない近世の高殿たら跡が神谷にあり、構造断面が露出している。

神門地区での遺跡の初見は、弥生中期である。古志本郷遺跡では、弥生中期の土器が僅かであったのにくらべ、田畠遺跡からは今年度の範囲確認発掘調査で、かなりの量が出土している。同遺跡からは、弥生中期に営まれた竪穴式住居跡が沖積平野面では初めて明確に検出され、集落跡の一端が解明された。また、住居跡からは、めのうや黒耀石が検出されている。

今年度の分布調査及び島根大学考古学研究室による前年度の分布調査によって、田畠遺跡、知井宮多聞院遺跡のほかに、新たに弘法寺参道付近遺跡、正蓮寺北遺跡、東原遺跡など7ヶ所で弥生土器が発見され、これまで知られていなかった神門地区の旧自然堤防上の遺跡がはじめて明らかになった。調査が進めば、神門地区の旧自然堤防上の遺跡の殆んどが弥生時代に遡る可能性が強い。

古墳時代になると、山麓に妙蓮寺山古墳が築かれるほか、横穴式石室内に有縁石床を置く放レ山古墳や、未調査ではあるがかなりの規模の前方後円墳である北光寺古墳などが築造されている。さらには、福知寺横穴群をはじめとする横穴が山腹にかなり数多くつくられている。また、旧自然堤防上にも、国指定史跡の宝塚古墳や、墳丘を消失した天神原古墳がある。この他にも、かつては多くの古墳が旧自然堤防上にあったらしいが、今はその姿を見ることができない。

奈良時代には、遺物の散布状態からみると、神門地区に大きな集落遺跡はないようであるが、調査が進めば、新たに確認されることも有り得る。

中世には、新宮川が開析した谷が、南から平野に出る通路として交通上の要衝地になってしまっており、淨土寺山城や栗栖城が築かれている。また、保知石谷には、保知石氏の居城としての高城があるほか、比布智神社の小丘や智伊神社の小丘陵が城館として配置されている。淨土寺山城は、水田との比高は低いものの、古志氏の居城として、かなりの郭が配置され城としての形態を備えているが、高城は主郭のほかには、殆んど郭らしいものは見当らない。

江戸時代では、産業遺跡として、たら跡がある。芦渡町の神谷たら跡は、熱残留磁気測定によって江戸時代後期であることがわかったが、これまでたら跡の多くは山間奥部で発見されており、神谷たら跡のように平野の山麓に立地するものは極めて少ない。現在、本床と南北両小舟の断面が露出しているので、たら構造の一端を窺い知ることができる。

2. 調査の概要

神門地区遺跡詳細分布調査は、昭和63年度国庫補助事業として実施した。

調査は、現地踏査による遺跡分布調査を行なったのち地形図上に遺跡を表示し遺跡台帳を作成する作業と、弥生時代以降の複合遺跡である田畠遺跡の遺跡範囲確認発掘調査である。

遺跡分布調査は、昭和62年12月から平成元年2月にかけて、神門地区全域を対象として踏査した。その結果、平野部ではこれまで知井宮多聞院遺跡など僅かしか知られていなかったが、東原遺跡をはじめかなり多くの遺跡が新たに確認されるという貴重な成果を得た。

また、遺跡範囲確認発掘調査は、昭和63年11月7日から12月19日まで実施した。かつて土地区画整理事業に伴う用水路工事によって遺跡が発見されて以来、これまで発掘調査が行なわれていないので、遺跡の性格は不明であった。今回の調査によって、遺跡の範囲は広くはないものの、弥生中期を主体とする集落遺跡であることが明らかになったが、とりわけ出雲平野でははじめて、旧自然堤防上から明確な竪穴式住居跡が検出され、集落の一端が解明できたことは大きな収穫であった。



図2 神門地区位置図



図3 田畠道路位置図

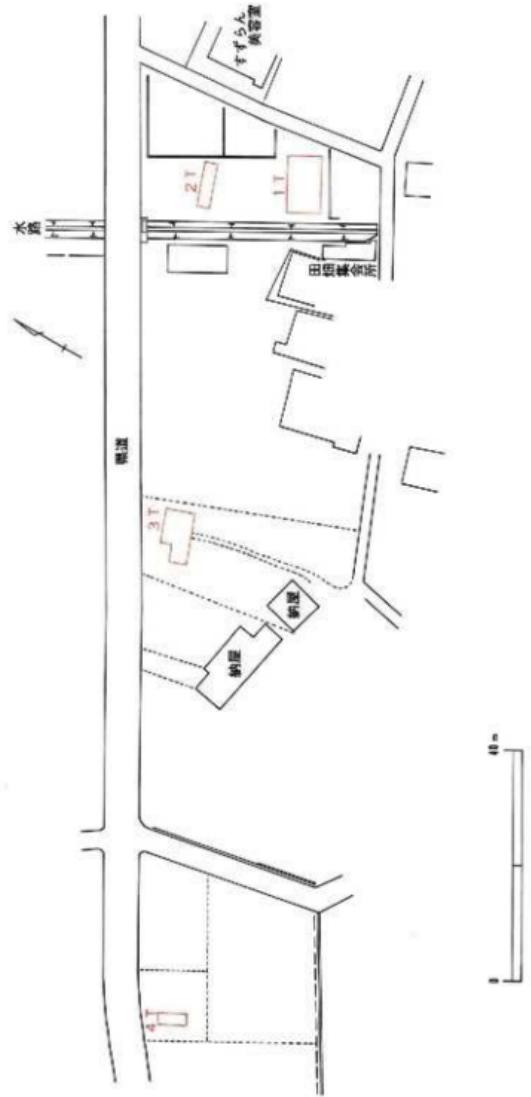


図4 田畠連絡トレインチ配置図

3. 田畠遺跡範囲確認発掘調査

第1トレンチ

遺構

本トレンチは、かつて用水路掘さく工事によって遺物が出土した地点付近の東側畠地に設定した。当初は、もう少し東方の畠地を選地していたが、田に盛土をして畠地としていることがわかったため変更している。

トレンチは、畠が狭いため $6 \times 10\text{m}$ の東西の長いトレンチを西と東にわけて調査し、西側は調査の過程で北へ幅 1 m を拡張した。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚20~30cm）の下に、明褐色土、黒褐色土、暗褐色土があり、その下は灰褐色砂礫（地山）になっている。

検出した遺構は、溝状遺構 5 条のほか、ピット 25 で、ほぼトレンチ全域に広がる。

溝状遺構は、溝Ⅰと溝Ⅱがしっかりしているが、その他は小規模なものである。溝Ⅰは西側の北端に検出し、トレンチを北に 1 m 拡張してさらに遺構を調査している。上幅は 1.7 m で、下底幅 0.8 m の断面が逆台形を呈し、深さは 0.7 m である。溝の上層や中層からは、弥生中期の土器のみがかなり出土しており、下底からは殆んど出土していないものの、土



写真1 第1トレンチ（北から）

図5 第1トレンドチ遺跡測量図

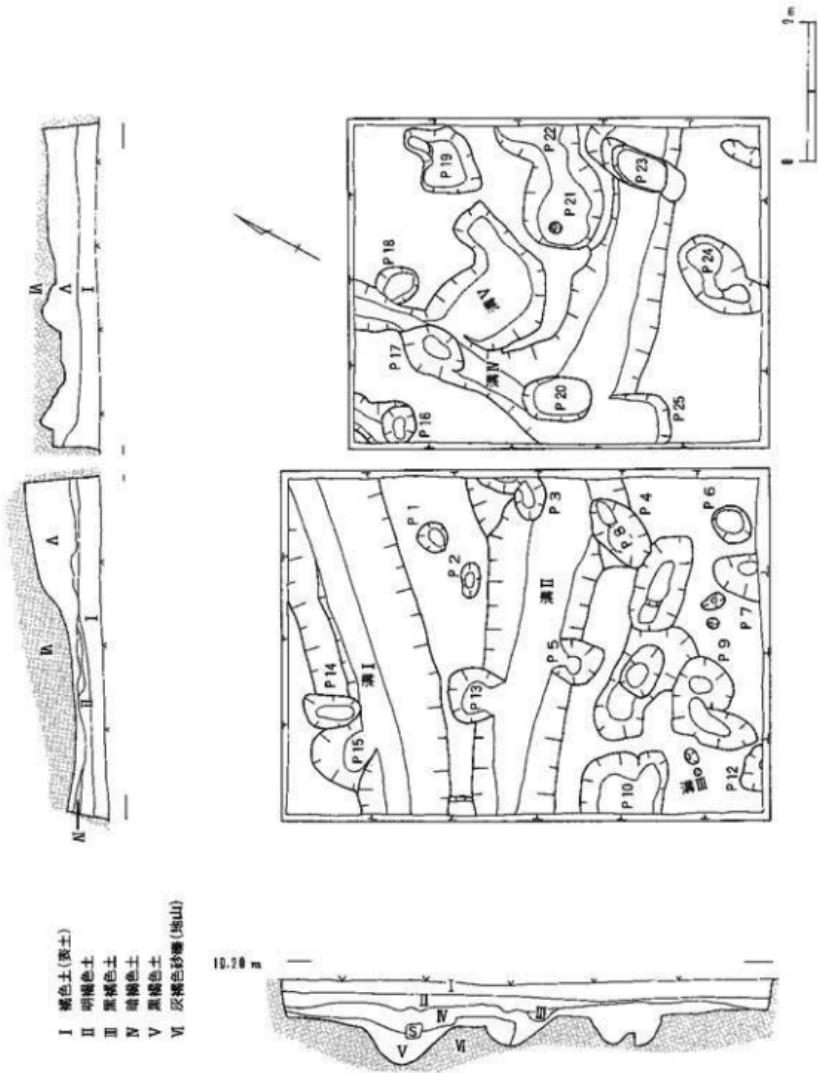




写真2 第1トレンチ発掘状況（東から）

層からみて当該期の溝状遺構と推定される。深さがやや浅く、5mしか明らかになっていないが、当該期にみられる集落を囲繞する環溝である可能性もある。溝Ⅱは、第1トレンチの全域にわたってほぼ東西方向に伸びる長さ10m以上の溝状遺構である。溝Ⅰとくらべるとやや規模が小さく、上幅1.5m、下底幅0.6m、深さは0.4mを測り、断面の形状は溝Ⅰと同じである。溝Ⅱからの出土遺物は弥生土器が多く、弥生土器を出土したP20などとの切り合い関係からみて、弥生～中世のいずれかの時期の遺構であろう。溝Ⅲは、浅い溝であるが、ピットが重複している。溝Ⅳは、上幅0.6m、下底幅0.2m、深さが0.2mの小溝であるが、遺物としては弥生土器が少量出土している。溝Ⅴは、幅広く浅い落ち込みであり、溝ではないかも知れない。

ピットは25穴以上あるが、半数以上は遺物が出土していない。ピットからの出土遺物で多かったのは弥生土器である。溝Ⅲと溝Ⅳは連続状になっており、その線上にあるP4、P9、P12、P17のうち、遺物が出土したピットからは弥生土器が検出されていることからみて1条の溝にピットがならんでいたと推測される。さらには、この溝の北端で、溝Ⅰが溝の走向を北向きに変えていることからみても、溝Ⅰとの関連が指摘できる。

なお、西側の上層で、南北に長い幅3m以上のかなり堅緻な面があったが、時期は不明である。

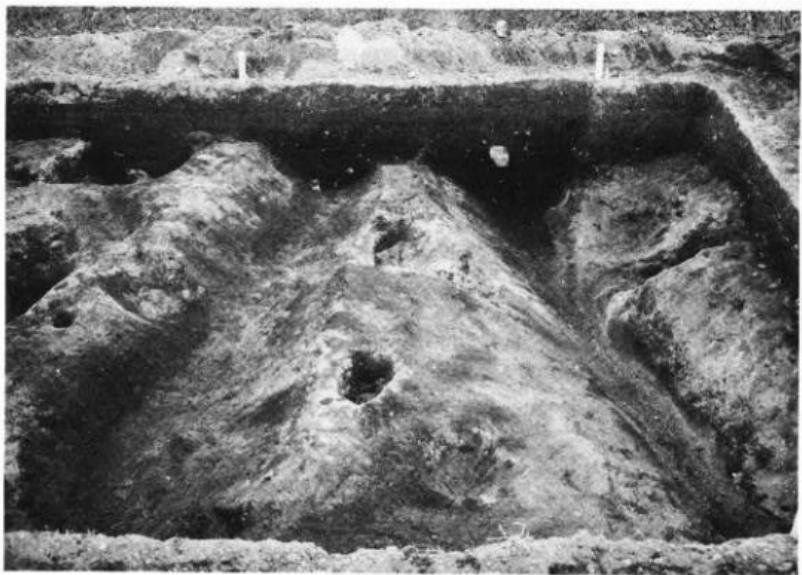


写真3 第1トレンチ遺構（西半分）



写真4 第1トレンチ遺構（東半分）

遺物

本トレンチは、かつて用水路から出土した遺物からみて、弥生土器がかなり出土すると推定していたが、結果的に予想通りであった。しかし、弥生土器のほかにも、量は少ないものの土師器、須恵器、中世陶器、土師質土器なども含まれており、かなり長期にわたる遺物がみられた。土器のほかにも、石斧1、鉄製品1、鉄滓が少量ある。

弥生土器は、弥生中期の特徴をもつもので、壺、甕などである。壺（図6-5）は、大きく外反する口縁部で、端部に5条を1単位とする斜格子を施文している。甕（図6-6）は、溝Ⅲから出土した土器で口縁端部に2条の深い凹線を施し、肩部から下の外面に刷毛目調整している。壺（図7-4）は、溝Ⅰから出土した出雲平野では類例の少ない弥生土器で、口縁部が直立するものである。壺（図7-5）は、溝Ⅰの上面から破片で出土したものを探合したもので、器形のわかる土器では最大のものである。屈曲した短い口縁の端部に2条の凹線を施し、胴部外面の列点文を境にして上を粗い刷毛目、下を粗い磨きを施すほか、内面もその位置で上と下の調整を変えている。P6からは、弥生土器の底部（図7-1）や、口縁端部（図7-3）が出土している。

また、東南隅で検出した砾群の中からは、輪状の耳をつけた備前双耳壺（図6-1）や、スタンプ文を施した鉢の口縁部（図6-2）など中世の遺物も出土している。

土器以外では、砥石（図6-3）や半欠した石斧（図6-4）があるほか、炉壁片や鉄滓が上層から出土している。



写真5 遺物出土状況

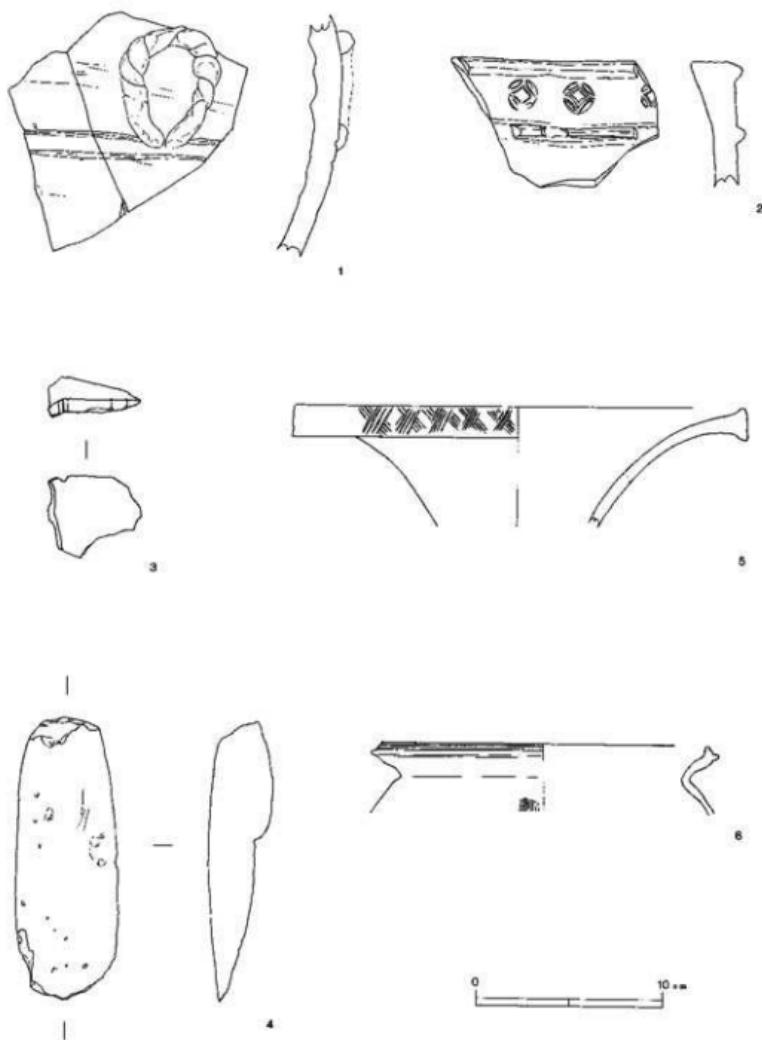


図6 第1トレンチ出土遺物実測図(1)

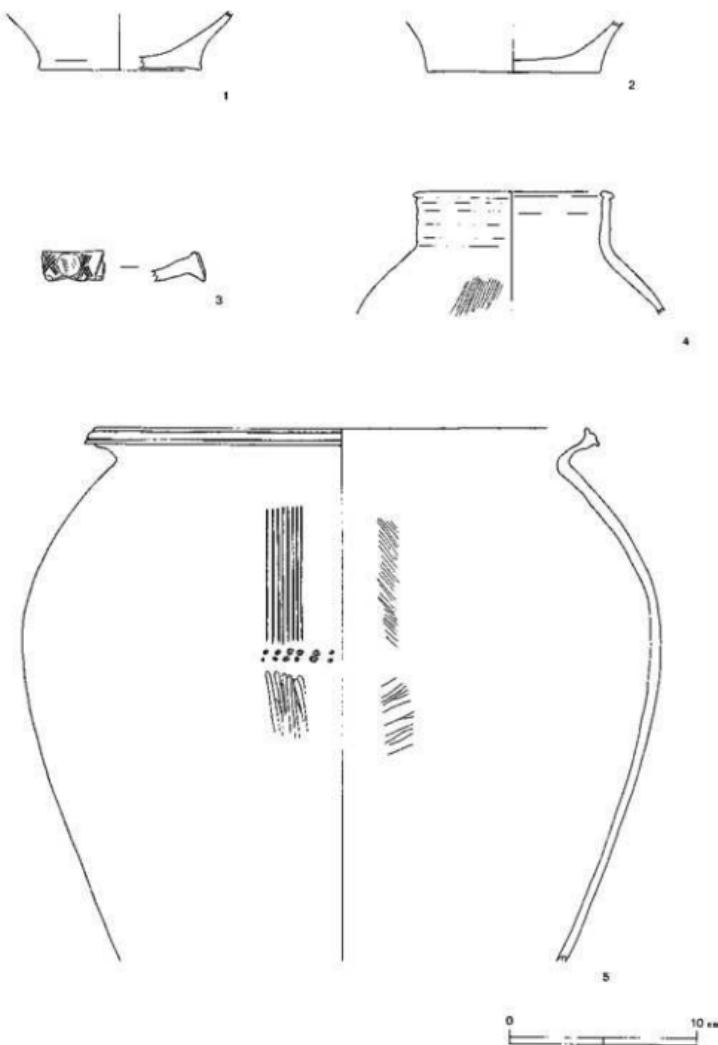


図7 第1トレンチ出土遺物実測図(2)



写真6 第1トレンチ出土遺物①

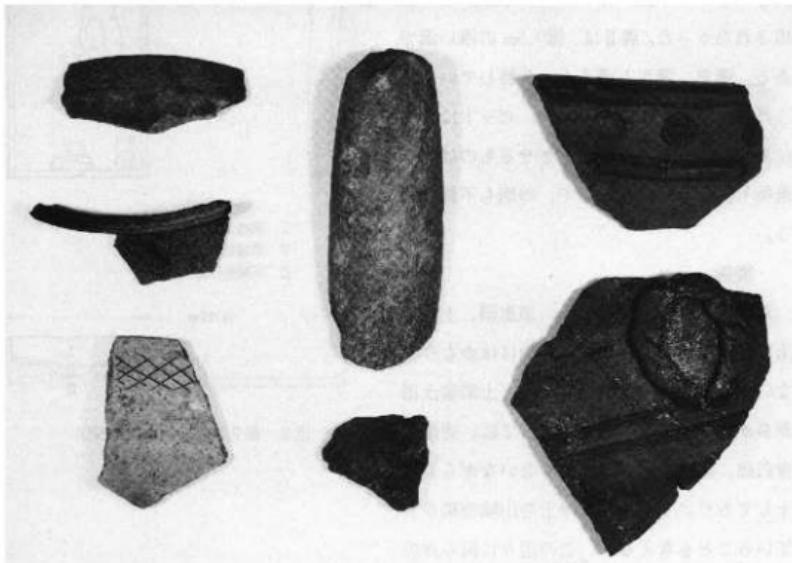


写真7 第1トレンチ出土遺物②

第2トレンチ

造構

本トレンチは、第1トレンチから10m北に設定した2×8mの東西に長いトレンチである。かつて用水路が掘られたときに表採された地点のすぐ脇にある。トレンチでの層位は、耕作土（層厚20cm）の下に黒褐色土があり、その下は灰褐色砂礫（地山）になっている。旧自然堤防の基層までの深さが浅く、第2層の黒褐色土が極めて薄かったりところによつては殆どなかったので、本来もう少しあったものが、耕作によってまわりと同じ高さにまで掘削されたものであろう。

造構としては、溝4、ピット11が検出できた。溝はいずれも極めて小規模なものである。溝Iは、ほぼ東西に伸びるが、東側にしか検出されなかった。溝IIは、幅0.5mの深い溝である。溝III、溝IVも溝Iから分枝しているようだが、詳しくはわからない。ピットは、数が多いものの、建物を想定させるものはなく、遺物も出土していないので、時期も不詳である。

遺物

遺物としては、弥生土器、須恵器、土師質上器、陶磁器などがある。量的にはかなり少ないが、その中では、弥生土器と土師質土器が多くいた。見るべきものとしては、青磁と青白磁、染付などの遺物が少ないながらも出土しており、すぐ南方に浄土寺山城が築かれていることを考慮すると、この辺りに何らかの関連する建造物があった可能性もある。

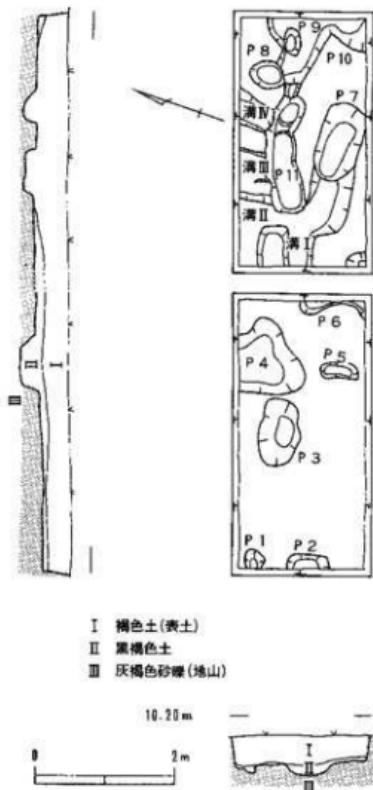


図8 第2トレンチ造構実測図



写真8 第2トレンチ造構（西半分）

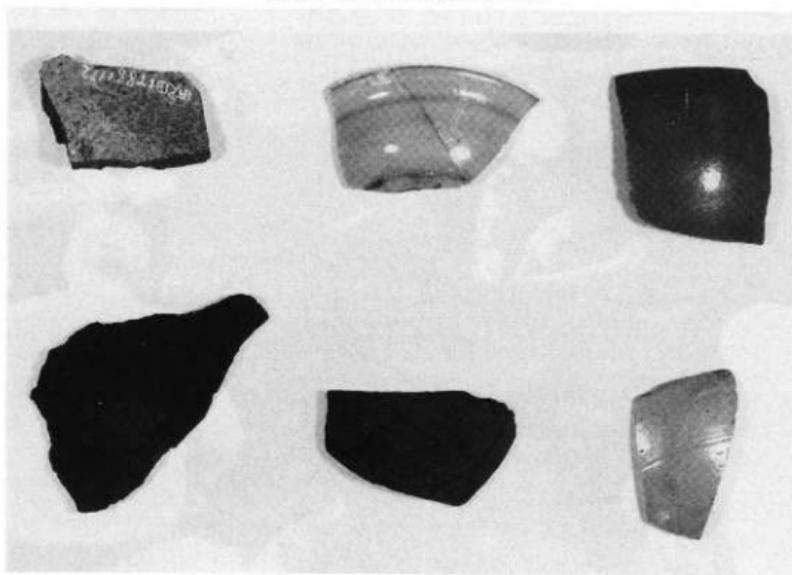


写真9 第2トレンチ出土遺物

第3トレンチ

遺構

本トレンチは、第1トレンチから約50m西に設定した。トレンチの規模は、 $3 \times 9\text{ m}$ の東西に長いトレンチを北に 2 m 幅で部分的に拡張した。調査にあたっては、A～Eの5区に分割して調査を進めた。

トレンチでの層位は、耕作土(30～50cm)の下に黒褐色土があり、その下は灰褐色砂礫(地山)となっている。

はじめにA～C区を掘り進んだが、B区の北半分に大きな落ち込みを確認したので、B区とC区の北側に 2 m 幅で拡張を行ない掘り下げた。

検出した遺構は、竪穴式住居跡1棟のほかピット35がある。

竪穴式住居跡は、平面プランがやや不整な円形で、規模は推定径 4 m である。地山である灰褐色砂礫層を少なくとも 0.3 m 以上掘り下げ床面としている。床面は平坦であるが、東南隅の一角の $1 \times 0.7\text{ m}$ の範囲がやや高くなっている。その部分にだけ黄褐色のシルトがあった。これは明らかに何らかの理由で盛土したものである。その他の床面は砂礫層を露出させており、貼床らしきものは発見できなかった。なお、このシルト層のある付近の壁面には小段がつけられており、外からの出入口となっていた可能性が強い。床面には、



写真10 第3トレンチ住居跡発掘状況

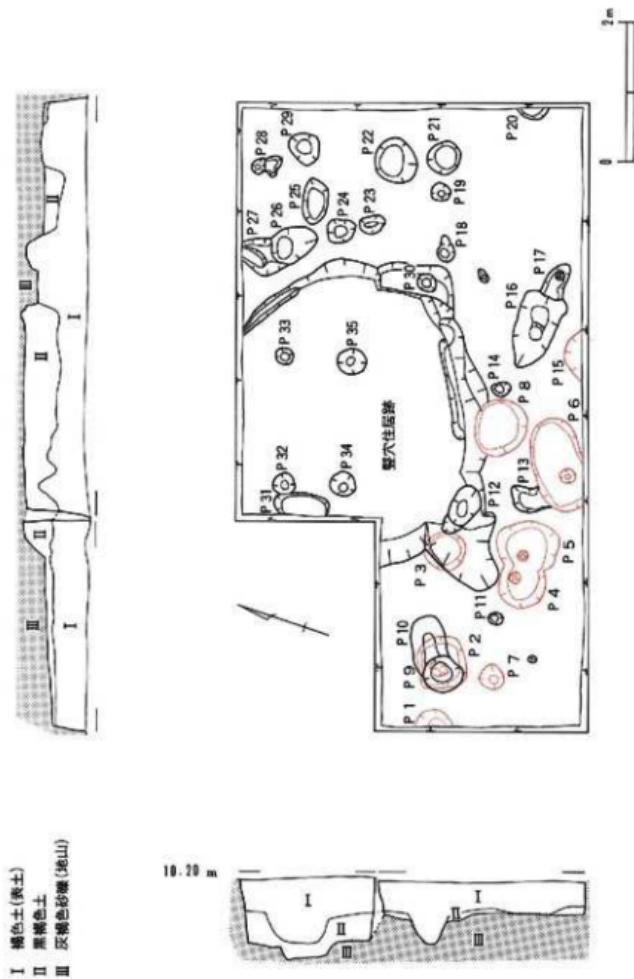


図9 第3トレーンチ遺構実測図



写真11 第3トレンチ住居跡（東から）

ほぼ同規模のピットが大小2穴ずつと、南北に細長いピット1穴が検出された。大ピットは径0.4m、深さ0.3~0.4m、小ピットは径0.3m、深さ0.15mで、大ピット間と小ピット間がそれぞれ1.8m、大ピットと小ピットの間隔が1.0mとなっており、配置に規則性が窺われる。細長いピットは、一部未発掘であるが、 $0.4 \times 0.8\text{m}$ （推定）の南北に細長いピットで深さは0.25mである。住居内に掘られているので何らかの施設であろうが、不明である。

また、住居跡の内部の壁面下には、幅20cm、深さ5cmの周溝があるが、確認できたのは南壁付近の1.4mと北壁寄りの1.0mであり、囲繞していたかどうかはわからない。

これまで、出雲平野の旧自然堤防上には数多くの遺跡がありながら、集落を裏付ける竪穴式住居跡が発見されておらず、矢野遺跡や古志本郷遺跡で可能性が高いものとして指摘されるに過ぎなかった。本調査ではじめて明確な竪穴式住居跡が検出されたことは、沖積平野における住居形態を知るうえでの貴重な成果といえる。さらには、第1トレンチで検出した溝Ⅰも同時期の遺構であり、集落とそれを囲繞する環溝となる可能性もある。

また、竪穴式住居跡からは、土器のほかにも石鋸、石鎌などの石製品とともに黒耀石やめのうが量的にはそう多くはないが検出されている。それらは上層、下層の区別なく出土しているが、平面的にみると、住居跡の西よりも東側からより多く出土している。めのう

の未製品や台石などは発見できなかったものの、この住居内で攻玉が行なわれた可能性は強い。古志本郷遺跡から水晶やめのうの原石片が出土したり、上組遺跡から水晶の未製品が表採されるなど、調査が進めば弥生時代の各遺跡から出土する可能性がある。

豎穴式住居跡のほかには、大小さまざまなピットが数多く検出された。ほぼトレンチの全域にわたるが、トレンチ西側のピットの多くは新しい時期のものである。遺物がないので断定できないが、おそらく近世頃の建物であろう。その他のピットからも殆んど遺物が出土していないが、P12からは須恵器の蓋環が1セット出土した。これらの多くのピットのうちには、豎穴式住居跡にかかわるものもあると思うが、遺物がなく明言できない。

遺物

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器の土器類と、石鋸、石鎌などの石製品、黒耀石やめのうの小片、古銭がある。

土器では、弥生土器が殆んどで、他は僅少であり、豎穴式住居跡からは弥生土器がコンテナ2箱分出土した。その器種は、壺、甕、高环がある。耕作土からは、甕（図10-3）と壺（図10-5）などが出土している。甕は底部片でやや上底になっている。壺は端部に3条を1単位とする鋸歯文を描き、口唇部に3条を1単位とする斜格子文を刻んでいる。住居跡から出土した遺物では、壺（図10-4）は、口縁部に3条を1単位とする凹線を描

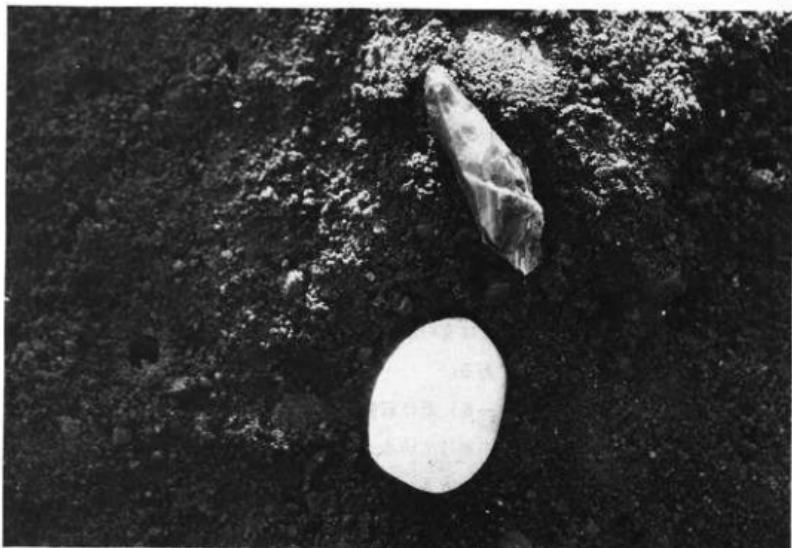


写真12 第3トレンチ住居跡遺物出土状況



写真13 第3トレンチ住居跡出土遺物

き、口唇部にも刻目を入れた二本の貼付突帯の間に配している。また、壺の底部（図11-1、図11-2）もある。甕（図10-7）は口径が22cmで口縁部に1条の凹線がある。甕（図10-8）は、口縁部に2条の凹線を入れているものである。本遺跡から出土した器種のなかでは極めて少ない高环（図10-6）は、口縁部に刻目を入れ、上面が幅1.5cmで平らなものである。

須恵器は、ほぼ完形で蓋（図10-1）と坏（図10-2）がP12からセットで出土しており、IV期のものである。

石製品は5点ある。石鋸（図11-3）は、自然石（堆積岩）の下端だけを磨いて刃としているが、これが完成品なのか半欠品なのかは判断しがたい。石鎌（図11-6、図11-7）は、一部が欠けているが黒耀石製ではない。との2点（図11-4、図11-5）は石器として使っているが、用途は不明である。

めのうは12点あり、1点（図11-8）だけ石製品として加工された痕跡がある。大むね玉造産のめのう原石とは形状が若干異っている。

黒耀石は45点確認しているが、そのうち半分以上が1cm以下の細片であり、調査の過程でも見落としているものもあると思われる。なかには、製品として加工した痕跡のあるもの（図11-11）もあるが、ほとんど剥片である。

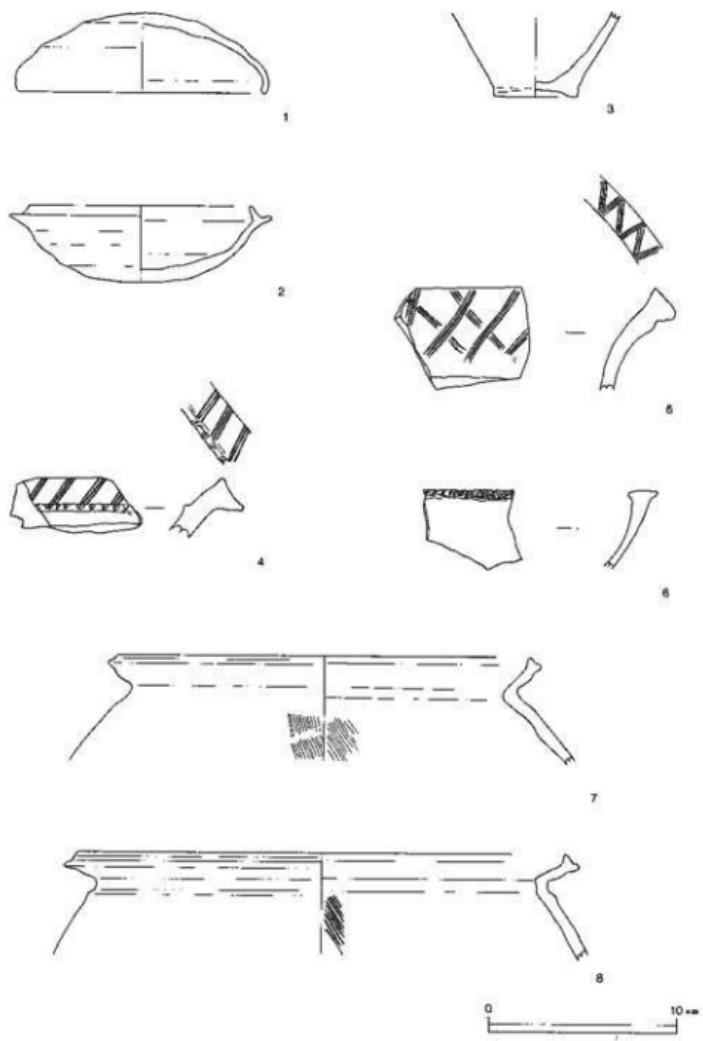


図10 第3トレンチ出土遺物実測図(1)



図11 第3トレンチ出土遺物実測図(2)

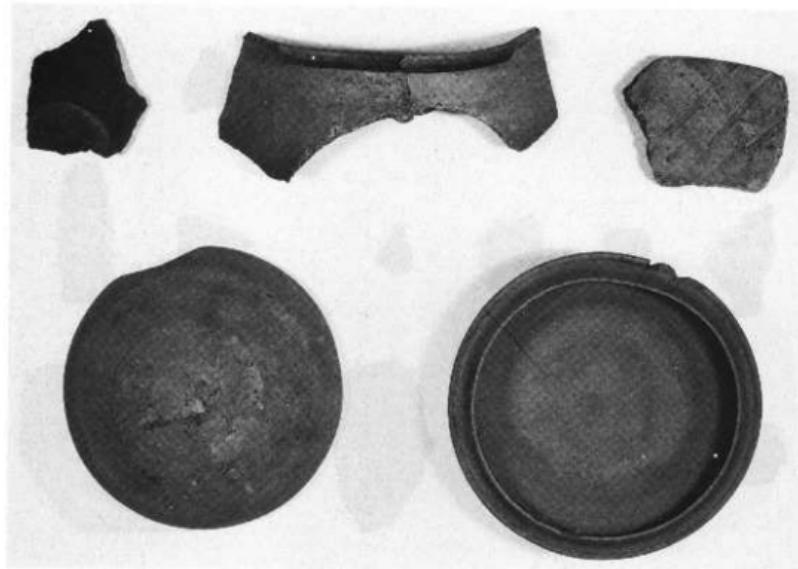


写真14 第3トレンチ出土遺物

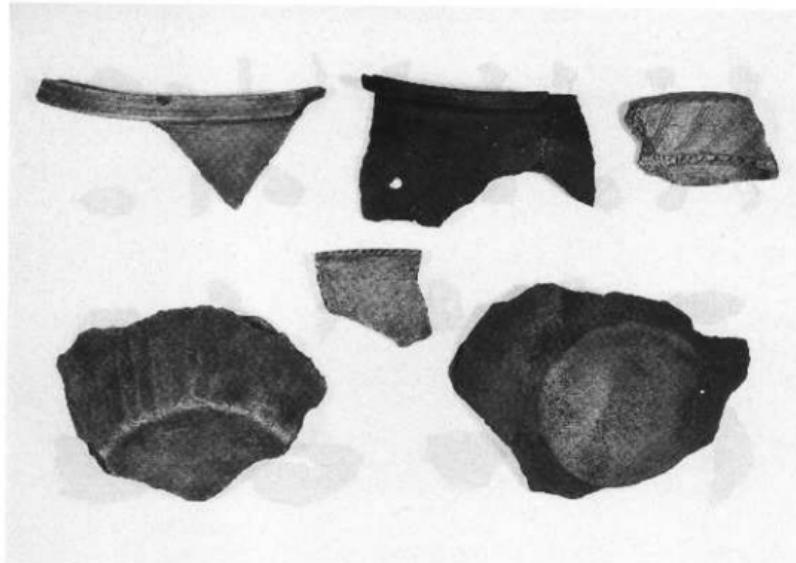


写真15 住居跡内出土遺物 ①

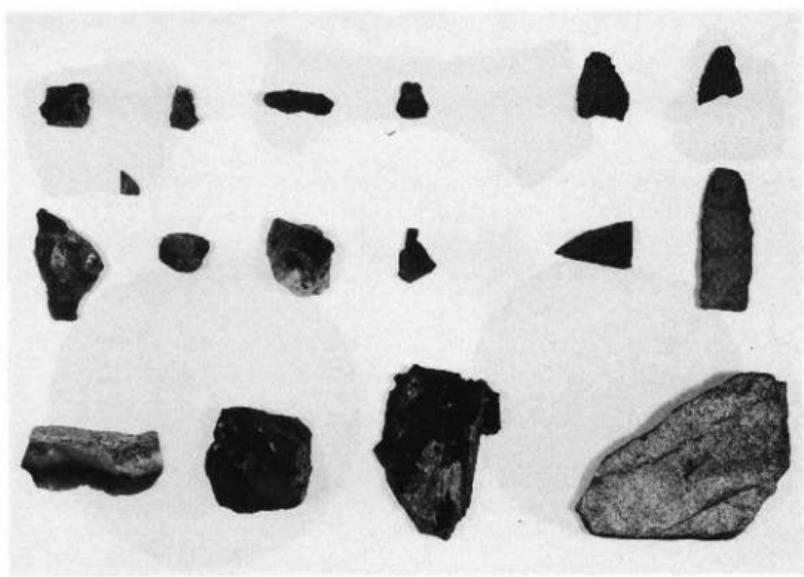


写真16 住居跡内出土遺物 ②

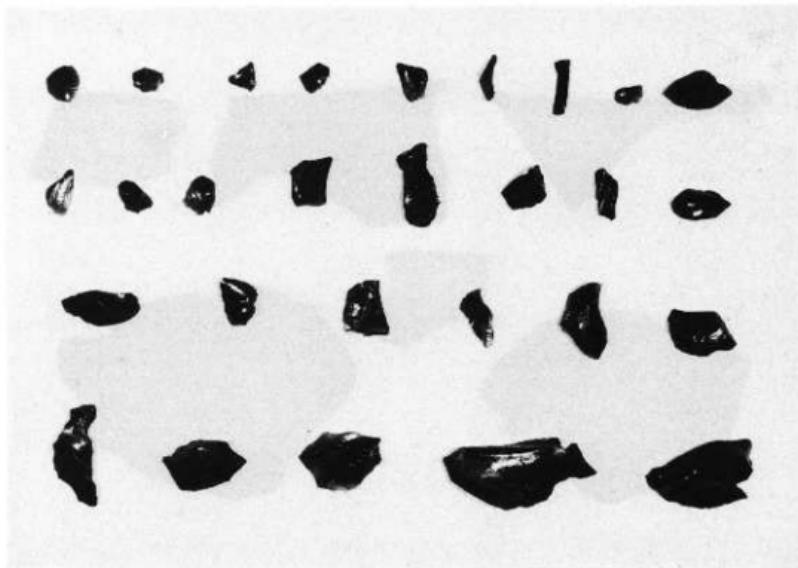


写真17 住居跡内出土遺物 ③

第4トレンチ

遺構

本トレンチは、第3トレンチの西方約80mの畑地に設定した。規模は、 $2 \times 5\text{ m}$ の南北に長いトレンチである。このトレンチは、田畠遺跡の西への広がりを確認するために配置した。

トレンチでの層位は、耕作土(30cm)の下に褐色土があり、さらに灰褐色土の下は灰褐色砂礫(地山)となっている。

このトレンチでは、耕作土の下にかなり堅緻な面が広がっており、ピットはなかったが建物又は道路などのために固められた形跡が窺われた。遺物は全く認められなかった。その下の灰褐色土は粘性があり、旧水田土であることがわかった。トレンチの発掘に着手して耕作土を除去してのち、地元の人からかなり前にはこの地点は水田であったと教示され、それが裏付けられたので、Ⅱ層とⅢ層は $0.5 \times 1\text{ m}$ の範囲にサブトレンチを入れ、地山の砂礫層まで確認するにとどめた。旧水田土の下には、旧自然堤防上にある黒褐色土層がないために判断しがたいが、すぐ西には上組遺跡があるので、本来は旧自然堤防が伸びていたと考えられる。

遺物は、耕作土の中から出土したものだけで、弥生土器、須恵器、陶器が少量出土したに過ぎないし、この遺物を含む土も他から持ち込まれ盛土されたものである。



写真18 第4トレンチ発掘状況

4. 遺跡詳細分布調査

神門地区遺跡一覧表

番号	種別	名称	概要
1	散布地	弘法寺参道付近遺跡	弘法寺参道の両側に広がる旧自然堤防上に立地する。東西200m、南北100mの範囲に、弥生土器、土師器、須恵器、陶器が散布している。ゴミ投棄穴での観察では、造構らしきものもあり、シルト層も確認できた。
2	散布地	正蓮寺北遺跡	正蓮寺の北、旧国道とJR山陰線に挟まれた付近が遺跡の中心であり、東西200m、南北130mの範囲に、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器が散布している。
3	散布地	下古志天満宮付近遺跡	天満宮付近の旧自然堤防上に立地し、東西125m、南北175mの範囲に須恵器、土師器の散布をみる。
4	散布地	阿弥陀寺西遺跡	阿弥陀寺の西方で、1987年の島根大学考古学研究室の調査により須恵器が確認されている。しかし、今回の分布調査では表採できなかった。
5	散布地	極楽寺付近遺跡	極楽寺の周辺の畑地に、須恵器、土師器、土師質土器が南北200m、東西100mにわたって広く散布している。
6	集落跡	田畠遺跡	今回の範囲確認発掘調査によって、弥生中期の竪穴式住居跡が検出され、出雲平野における集落の一端が初めて明らかになった。また、攻玉もおこなわれていた可能性が強い貴重な弥生遺跡である。
7	散布地	上組遺跡	田畠遺跡のすぐに西に所在する遺跡である。今回の表採によって、須恵器、土師器、陶器のほかに、三面の結晶面を残す水晶の未製品や、めのう原石が得られている。また、西及び北の田にも須恵器等がかなり散布しており、旧自然堤防を開墾して田地とした可能性が高い。
8	古墳	宝塚古墳	別名一保塚とも呼ばれる、横穴式石室に家形石棺を内蔵する国指定の後期古墳である。現在は水田の中に孤立しているが、かつては旧自然堤防上にあったと思われる。

番号	種別	名 称	概 妥
9	古 墳	天神原古墳	出雲西高校のすぐ西の水田にあり、圃場整備の用水路工事で、円筒埴輪片が多量に出土したことから古墳の存在が明らかになっている。現在、墳丘も消失し、水田になっている。
10	散 布 地	芦渡遺跡	JR山陰本線を挟んだその南北に広がる遺跡で、東西100m、南北75mの範囲に、弥生土器、土師器、須恵器、陶器が散布している。
11	散 布 地	東原遺跡	第二市民病院の南に、南北200m、東西100mの範囲に遺物の散布をみる大きな遺跡である。遺物の量は比較的多く、弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器、陶器が散布している。水田となっている範囲が広く、かなり遺跡は損われている可能性もある。
12	散 布 地	多聞院北遺跡	多聞院遺跡の北に広がる遺跡であるが、遺物の散布範囲は広くはない。旧神戸川が入海へ流れ込む河口の南側にある。弥生土器、土師器を表探しした。
13	集 落 跡	知井宮多聞院遺跡	矢野遺跡とならび、出雲平野を代表する弥生遺跡である。貝塚を伴う遺跡として広く知られ、これまでに明治大学、大社考古学会の発掘調査が行なわれている。
14	散 布 地	觀知寺付近遺跡	觀知寺の東や南の畑地から、弥生土器、土師器、須恵器が認められた。
15	散 布 地	嘉儀遺跡	旧国道のすぐ北側の畑地に、東西100m、南北50mの範囲に弥生土器、須恵器が散布している。
16	城 館	智伊館	智伊神社の裏山にあり、南方にある保知石氏の居城、高城に間違があると思われる。
17	横 穴 群	真幸ヶ丘 横穴総群	福知寺横穴群（市指定、20穴以上）を中心とする横穴の一大密集地である。
18	城 館	比布智館	比布智神社のある独立小丘陵の頂部に土塁で囲繞された館跡がある。
19	祭祀跡(?)	間谷西遺跡	小丘陵の尾根に直交する溝状遺構から筒形器台などが出土したが、出雲電車基地の造成工事によって消滅した。
20	古 墳	間谷古墳	浅柄谷の西の尾根上にある小円墳で、切石の横穴式石室をもつ。今回の分布調査では確認できなかった。

番号	種別	名称	概要
21	古墳	間谷西古墳	間谷の谷奥にあり、18×13mの方墳の可能性が強い。
22	瓦窯跡	間谷瓦窯跡	近代のものと思われるが、実体は不明。
23	古墳	間谷東古墳	間谷の東尾根上の緩斜面にある径14m、高さ1mの小円墳である。すぐ北には道路法面の崖がある。
24	古墳	浅柄南古墳	浅柄谷の奥まった東尾根上にある径10m、高さ1mの小円墳であるが、墳丘はかなり損われている。
25	古墳	浅柄古墳	かつて発掘調査が行なわれ、箱式石棺と人骨が認められているが、今回の分布調査では確認できなかった。
26	古墳	北光寺古墳	全長50mをこえる前方後円墳であるが、未調査のため詳細は不明である。
27	城館	高城	保知石谷の西にある保知石氏の居城で、25×13mの主郭などがある。
28	たら跡	神谷たら跡	近世後期の高殿たら跡であり、現在本床と小舟が露出している。
29	横穴群	深田谷横穴群	2穴からなり、うち1穴は、線刻の人物壁画があることで知られている。
30	横穴群	地蔵堂横穴群	妙蓮寺山古墳の南西400mにある小丘にあり、昭和10年、果樹園に開墾中に10穴が確認されている。
31	古墳	妙蓮寺山古墳	自然石と割石による横穴式石室に、横口式家形石棺がある。県指定史跡であり、石室の閉塞状態がよくわかる古墳である。
32	城跡	浄土寺山城跡	妙蓮寺の裏山にある古志氏の居城で、いくつかの郭や土壘、堀切が認められる。
33	古墳	放レ山古墳	切石の横穴式石室をもつ小円墳で石室内に石床がある。県指定史跡である。
34	横穴群	放レ山横穴群	放レ山古墳のすぐ南の崖にあり、3穴が確認されているが、かなり崩れている。



写真19 田畠遺跡（北西から）



写真22 比布智館跡（西から）



写真20 浄土寺山城跡（北西から）



写真23 神谷たら跡（南から）



写真21 妙蓮寺山古墳（東から）



写真24 宝塚古墳



写真25 放レ山古墳



写真26 妙蓮寺山古墳



写真27 分布調査表採遺物

凡 例

1. 遺跡地図は、神門地区を7区分している。
2. 遺跡地図①～⑥は、2千5百分の1出雲市都市計画図を2分の1に縮小し、遺跡地図⑦は、1万分の1地形図を3分の1に縮小して使用している。
3. 図中の記号は、次による。

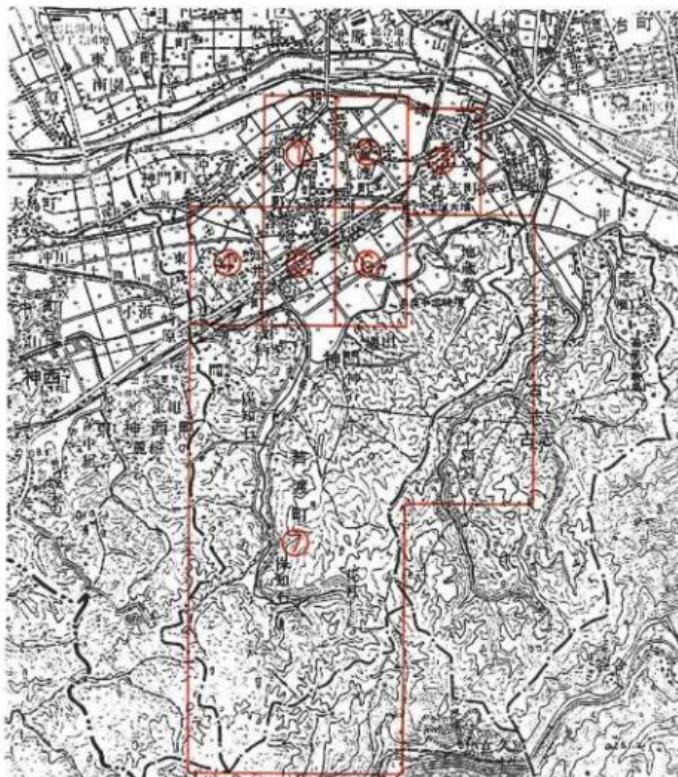


図12 遺跡地図区分図

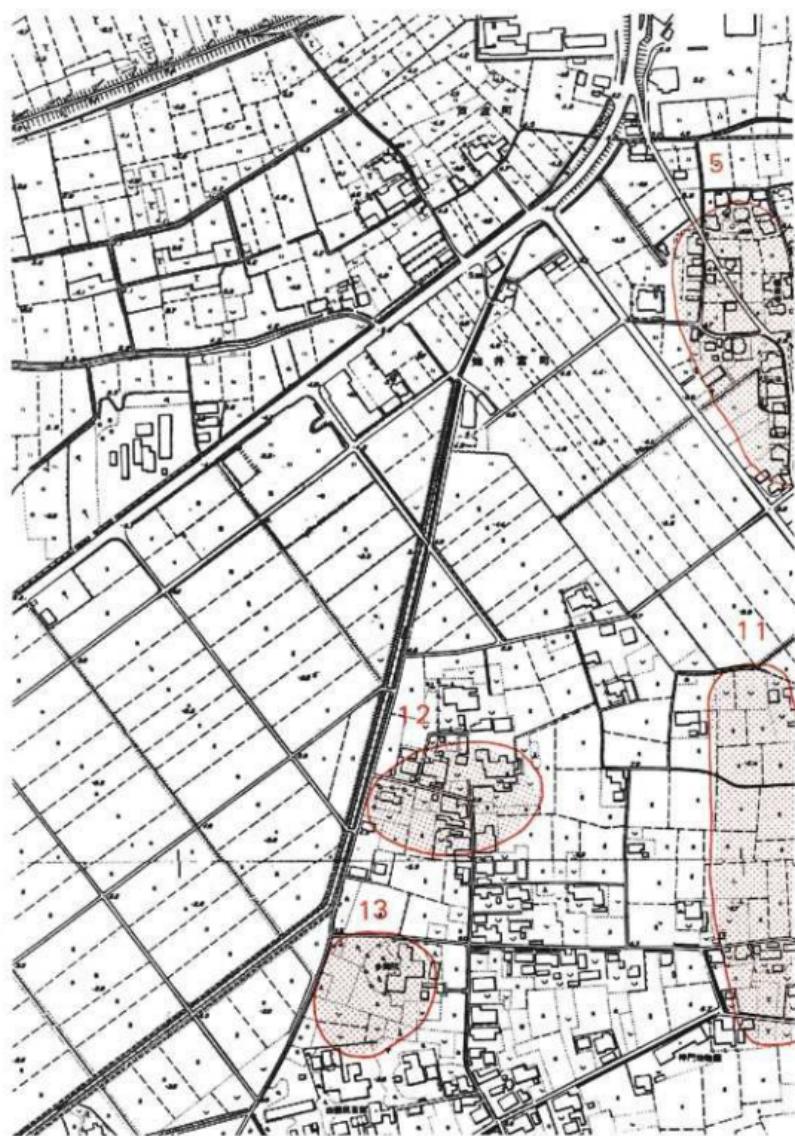


図13 道路地図①

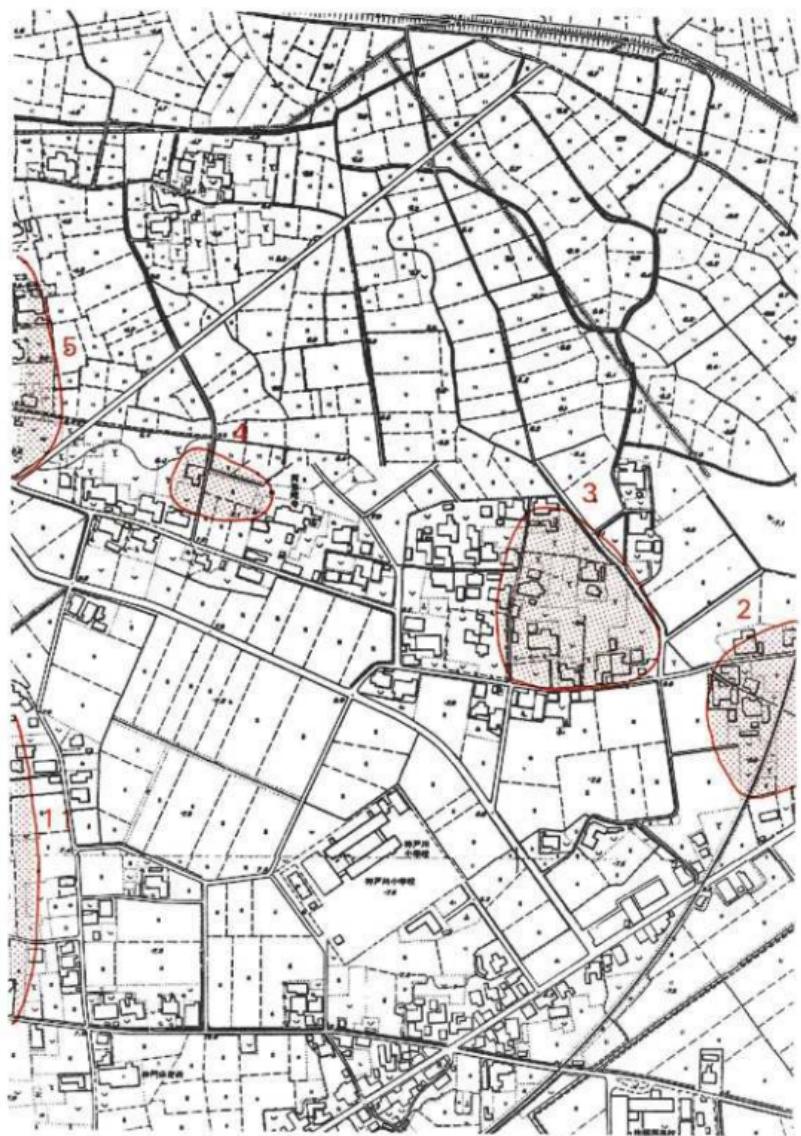


図14 遺跡地図 ②

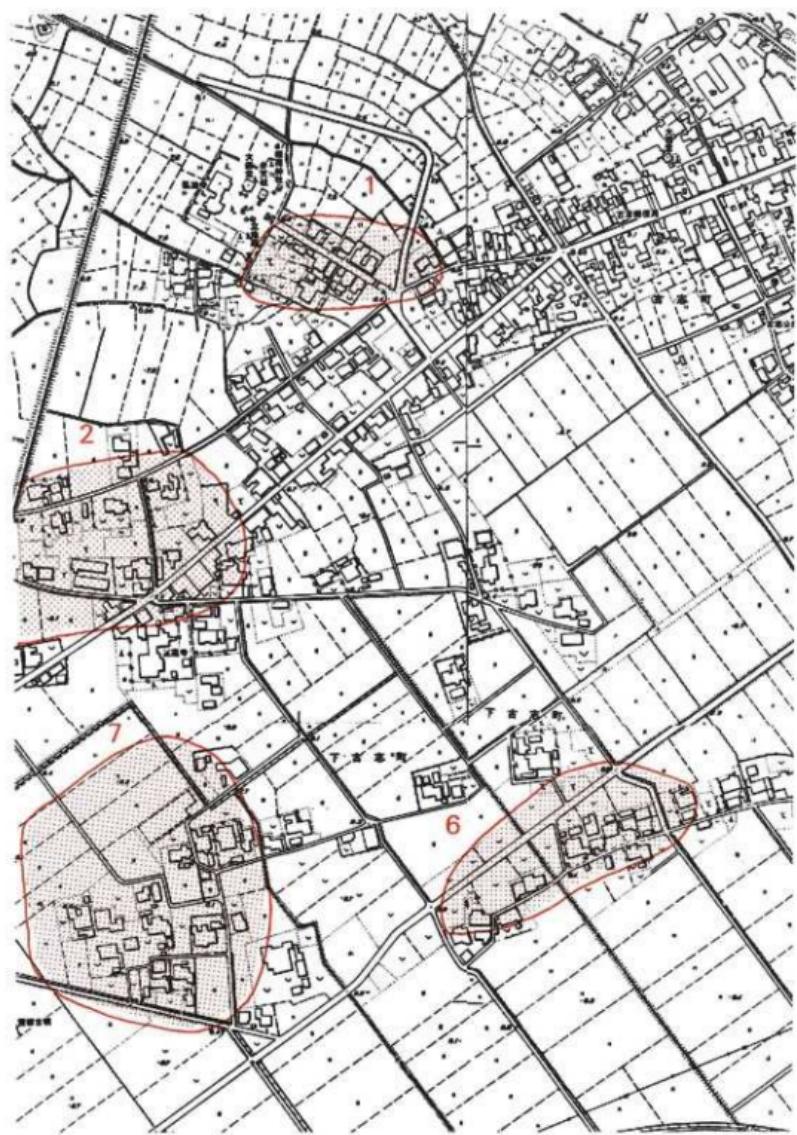


図15 道路地図③

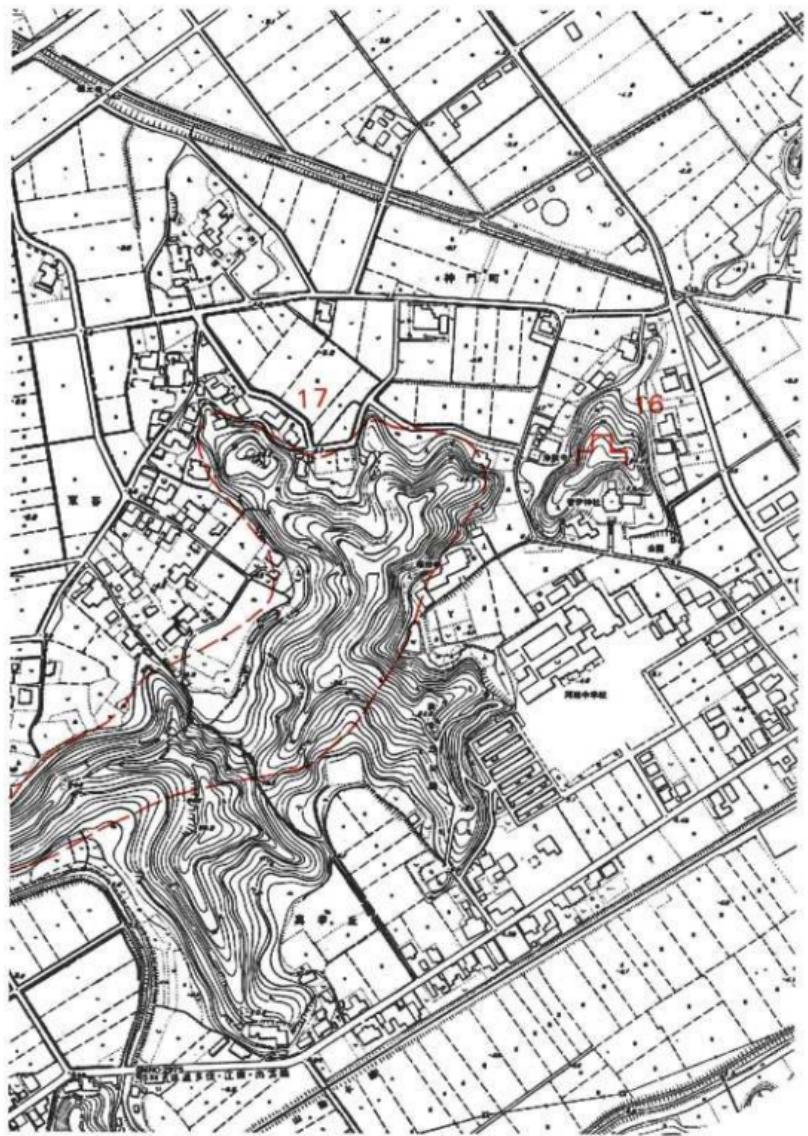


図16 遺跡地図④



図17 遺跡地図⑤



図18 遺跡地図 ⑥



図19 道路地区⑦

平成元年3月25日 印刷
平成元年3月30日 発行

神門地区遺跡詳細分布調査報告書

発行 出雲市教育委員会
印刷 伊藤印刷